

# ねこの みこの

猫菫通信

第22号

平成八年

(1996)

1月15日発行

(年4回発行)

## 平句の切字について

東明雅

前号に掲載した「猫菫会式目の整理」の中、「一巻の構成四の5」で「発句以外に切字「や・かな」を嫌う」と述べたが、言葉が足りず、誤解を受ける可能性が多いので、ここに補説して、私の真意を述べたいと思う。誤解を恐れる第一は、「や」・「かな」以外の切字でも、一切平句に用いてはならぬ、あるいは用いない方がよいと錯覚する向きも多いのではなからうかということであるが、そのようなことは決して言っていないのであって、芭蕉関係の作品を調べても、たとえば、「けり」とか「なり」とかいう切字は、比較的頻繁に平句に使われており、芭蕉が推奨した俳論書「俳諧無言抄」などには、四句目の作り方として「四句目ぶりとて、「也」・「けり」などの軽き留りにて、ふしなきをこ

のむ也」とあって、切字のうち、特に「なり」・「けり」などは軽い留字として積極的にすすめているものもある位である。もちろん、四句目以外の平句に「なり」・「けり」などを用いることも決して禁じられてはいない。流石に、「や」・「かな」などの切字は、芭蕉関係の作品中、平句に用いられることはすくない。しかし、探せばいくつかの例を見ることができる。

1 初はなの世とや嫁のいかめしく  
2 市に出てしばし心をしはすかな

3 やぶ入の嫁や送らんけふの雨  
4 妹がりや薄に穂蓼の生茂り

5 かげろふや海手の花の盛なり  
6 一株の薄は物に似たるかな

などは、これらの切字の働きによって二句一章の体となり、句の中の季語と相俟って完全に一つの美術的世界を作り出し、殆ど発句と同じ相を呈している。これでは連句では困るのである。そもそも連句は前句と付句両句の付け合わせによって、一つの芸術的世界を創り出すものであるが、その前句あるいは付句が、その一句の中ですでに完璧な世界を創り出しているとするならば、さらにその句につける事は蛇足であり、無意味であろう。これでは困るのであって、私が平句に「や」・「かな」を嫌った理由はここに存するのである。

しかしながら、同じく「や」・「かな」を

使っても、発句のような完璧な世界を創り出さないものもある。

7 おかざきや矢矧の橋の長きかな

8 きぬぎぬや烏帽子置床忘れたり

9 面白の遊女の秋のよすがらや

などは、あるいは一句の中に季語がない為、あるいは季語はあっても一句の中に一種の終助詞的役目だけしか示さない為でもある。

そして、以上はみな平句の中でも長句のみについて述べたのであるが、短句では発句みたくになる可能性がない為か、より自由に「や」・「かな」が用いられている。

10 生鯛あがる浦の春哉

11 さても鳴きたるほととぎす哉

12 片はげ山に月を見るかな

13 いざりふびんやおぼ捨の月

14 奈良はやっばり八重桜かな

式目を整理する時、各項をなるべく簡潔にしたいという希望はあったが、それにしても言葉足らずの感は免れない。畏友片山多加夫氏は「発句以外に切字「や・かな」を嫌う。但し、切字の働きのない「や・かな」は一巻の飾りとして一句程度許される」という試案を示された。それでもよいと思うが、こうなれば、むしろ「一巻の構成四の5」全体を削除し、この件は作者各人の判断による処置に委せた方が穏当かとも考えている次第である。

## 越中連句事情

### 二村 文人

平成五年七月三日を「いなみの日」と名付け、全国連句いなみ大会を開催した折には、各地から歌仙二三〇巻の応募があり、一五〇名の方においでいただきました。猫蓑からも大勢の皆さんの参加があり、亡くなった杉江杉亭さんや福井隆秀さんもお元氣な姿を見せてくださいました。

平成五年は、井波の名刹瑞泉寺の第十一代住職浪化上人が、芭蕉に入門して三百年になる年でした。芭蕉は元禄二年の「おくのほそ道」の旅で、富山を素通りしてしまいました。その理由については現在も諸説ありますが、あとになって芭蕉の通過を知った当時の地元の人達は大変残念がっています。浪化もその一人でした。その後、浪化は元禄七年閏五月に、去来を介して嵯峨野の落柿舎で芭蕉に対面し入門しています。芭蕉はその年の十月に没していますから、まさに最晩年のたった一度の機会だったことになりました。浪化は義仲寺の芭蕉の墓に詣でて、墓のほとりの小石を拾って帰り、また遺髪をもらい受けて、井波に翁塚を建立しました。現在黒髮庵のある所です。

黒髮庵は、『芦丈翁俳諧聞書』にも登場し

ます。

(下平可都三と流芳が)越中の黒髮庵だと言ったが、旅へ出た時おちあって、やあ久しぶりだったなあちゅうわけで、(中略)両吟を二巻立てて、二人ではこぶと、そしてたら早いとも早いとも、まあその二時間で二巻まいて、西と東へ別れて行った・・・

このように、諸国を行脚する俳諧師の交流の場になっていたのでしょう。

さて、富山県には平成四年に連句協会が発足しました。会長は志田延義氏で、今年卒寿を迎えますがなお矍鑠たるものです。父上の素琴志田義秀博士も俳文学者で、その蔵書は志田文庫として富山県立図書館に収められています(ちなみに富山大学にはラフカディオ・ハーンⅡ小泉八雲の全蔵書を収めたヘルン文庫があります)。

また、同じ年に井波町にもいなみ連句の会が結成されました。井波は、戦中から戦後にかけて前田普羅が滞在したこともあって、俳句の盛んな土地柄です。縁あって蕉門伊勢派の連句の伝統をほんのわずかですが私が伝え、また全国連句いなみ大会に東明雅先生を選者としてお迎えしたことで、芭蕉が越中を通過して以来三百年にわたった宿題を果たすことが出来たような気がしています。

私は、学生時代に東先生から蕪村の『冬木

立』の巻を習いました。それから二十年、今年度は自分の授業で試みに浪化の俳諧撰集『有磯海』『となみ山』を取り上げました。

前期は『有磯海』の発句四百余句を半ば強引に読み通し、後期は『となみ山』の歌仙二巻を毎週六句ずつ読んでいきます。どうしても田園風景を詠んだ句が多くなりますが、当てにしていた地元出身の学生は農作業に関する知識がほとんどなく、半分ぐらいは意味が取れません。ここでも井波の年長の連衆から教わることが少なくありませんでした。

いよいよ本年九月二十九日(日)は、その井波町で、国民文化祭とやま'96が開催されます。場所は三年前と同じ瑞泉寺会館、募集作品は「あとに残る作品を」という志田先生の意見で、今回も歌仙です。当日はお集まりの皆さんにゆっくり実作を楽しんでいただく、講演会などのセレモニーは極力少なく改めました(翌日の合同大会で大岡信氏の記念講演があります)。

根津芦丈師は、行脚と校合の大切なことをくり返し述べています。全国の連衆が一堂に会する国民文化祭には、あるいは行脚の精神に通じるものがあるかも知れません。瑞泉寺や黒髮庵で(現代の)行脚を体験していただけるよう準備を進めているところです。どうぞ皆さんでお出かけください。お待ちしております。

新春に寄せて

中田 あかり

七福神が個性豊かに宝船に乗っていらっしやいます。若しこの皆様が連句を巻くとしたら、捌は誰方に致しましょう。長唄宝船に、毘沙門さんのじゃらつきを見兼ね布袋がノオサツノサー。というくだりがありますので、取りあえず布袋様にお頼みしたいと思えます。

私が今でも震えそうになる言葉は、「和歌三神を背に負いて捌く」という明雅先生の教えです。私達が発句を定める時、各自が出句して高点を発句とすることが多々あります。しかし高点句即良い発句とは限らず、時々惜しい気がしないでもありません。むしろこの句を発句として巻き上げたい連衆が多いという点で気持ちが一致出来る、いわば民主主義的效果でしょう。又作句より難しい選句をする。これは前出の捌の心得の入口を覗くことにもなり、この時こそ連衆の背に和歌三神が宿るのです。発句を案ずる練習になることは勿論です。

捌の責の重さは言うまでもありません。その志す処により連衆の思考の流れは様々に変わる。熱帯か北極か、どの一句を取るかによる。一巻の命運が別れる。心の琴線に触れる何かを求めつつ、かき分け選り分け巻き進む楽しさ。この捌きと連衆の共有する時間はまさ

に至福であります。

転じる為には打越と前句をしっかり見定めねばなりません。私は前句に対する付味、付心が大切だとつくづく思います。転じは連句が巻き上るまで続きますので、一巻の終り頃になると鉛筆で書きこんだ凡てに目が行き、付句の列が重く感じられることがあります。前句が強いとひきこまれ、たけくらべなどと風流に押し戻される。又齒の浮くような句が一巻の中に埋めこまれた時の楽しさ。

美しき嘘 苦き真実

などその中に誠が含まれているだけに、一座の笑いを誘い輝くのです。

連句の不思議さ。セアカドクグモも捕らえて餌食にしてしまった。私達の眼は森羅万象、ひそやかな人の心に対してさえ、きらきらと光り受け入れる用意をしています。恋句の名人に私はその秘密を伺ってみました。

「小説をずいぶん読んだのよ」

ショートカットの彼女に逃げられたと思っただ。その方と私は最上川を下り、ワンマン列車に乗り素朴な旅の思い出をつくりました。

私は連句の流れ、運びに迷いが出た時は「こがらしの巻(冬の日)」を読み、心を沈め躍動させます。

宝船に相乗りし、厳しい現在を離れた私の連句三昧のひとりごとでございました。みなさま今年もよろしくお願い申し上げます。

初々しくありたい

中村 千恵

「また(股)引の朝からぬるる川こえて」  
ためらいなく読み上げた時、加藤楸邨師は困ったような悲しいような表情で私をちらりとご覧になった。「きみ、それはもも引きだ」  
私にとって、連句に関わる最初の記憶は、いつも学生時代のこのシーンに戻って行く。  
これで、卒論のテーマが「猿蓑」。だから、出来は推して知るべしで、その故か、師は卒業に際しておっしゃった。「何でもよい、一生かけて学び続けるものを持つといいね。一日一時間でも積み重ねて行けば、だれでも素晴らしい成果が得られるはずだ」と。まことにその通りとお言葉は胸に染みだが、凡人の哀しさ、なにを成すでもなく時はあつという間に過ぎた。

合わなくなって久しい友人を急に懐しく思い出すように、ふっと連句に思いが行き着いて、カルチャーセンターの仲間に入れていただいた。実作を始めてみて、連句の奥深さに触れるにつれ、二十歳そこそこの女子学生に連句の何が分かっただろうと思うこの頃、  
「また引きの朝よりぬるる川こえて 凡兆」と読んでかつての自分が、いまはいとおしくさえ思えてくるのである。

島村 曉巳

昨年の十月にACCに入学いたしました。連句を始めて二年ですが、今までは実作中心で何か隔靴搔痒の感がありました。それが、式田、秋元両先生の名講義と明雅先生の短いながら核心を衝くご回答の中で整理され、とても充実した二時間です。窓の外の見事な富士を眺める楽しみと相俟って待ち遠しいくらいです。とは云え楽しい事ばかりではありません。「生徒」とはとても思えぬベテランの中で、短時間で句を案ずるのはなかなか大変です。それと何といっても発句です。本格的に俳句をやっていない私には当然の報いですが、発句の良いものが全然出来ません。何時か終講の直前に発句を提出することがありましたが、次回に皆さんの作品を見てその素晴らしさに仰天しました。時間の有無は句の良否には無関係であることと、「即興」という連句の真髓を学びました。作品における発句の重さは絶対です。今年は一句でもものにしたいと思えます。

新年に当り今年ももっとこの魅惑の世界に浸り、その奥深さに少しでも迫りたいと念じています。猫養会の皆さまよろしくご指導下さい。

連句入門

日高 玲

教授に誘われ、初めて連句の会に参加したのは、学校を卒業して間もないころでした。連衆の中に若い女子は、私と友人のみで、無知で無謀な短冊をだしては、捌手を閉口させたものでした。

日の歩み数へて八十三の春 牛耳

そこで、捌手をし、指導してくださいましたのは野村牛耳という方でした。手元にある連句集「摩天楼」を見ますと先生は、ご高齢でしたが、若々しく、柔軟で闊達な精神の持ち主でいらっしやうした事がわかります。未熟な私がようやく出す句を評してください、分派した女性中心の連句会(当時珍しい)の発足を激励してくださいました。私がこの会に参加したのは、短い間でしたが、以来連句とは無縁でしたが、この度、東明雅先生に改めて教えて頂くうと思いましたが、その時味わった楽しさ故でした。

実を申しませば、東先生には、かつて何度かお目にかかったことがありました。名乗る程の者でもない私と思ひ、ご挨拶も致しませんでした。失礼をご容赦ください。また、徒司さんにも、同様の非礼をお詫びしたいと存じます。

連句との出会い

大竹 朝子

連句とのかかわりは数年前に遡る。友人が連句の会があるというので、誘われるままに参加してみたことがきっかけである。連句の何たるかも、約束ごとの予備知識もないままにでかけていったのだから無謀というほかはない。その時ごちそうになった友人の手料理のおいしかったことだけは鮮明に覚えているので、たぶん目的が違っていたのだろう。

ただ、その頃、ちょうど俳句を囁りはじめていたので、俳句とは切っても切れない存在としての連句に対して親しみを覚えていたことは確かだ。

勤めている関係上、平日は時間がとれないが土曜日に講座があることを知り、ちょうど良い機会なので勉強させていただくことにした。十月から始め、はや3カ月も経ったのに何も掴めていない。知れば知るほど俳句との違いに驚くばかりだ。窮屈な決まり事もたくさんあって覚えきれない。が、逆に制約が多いほど自由になれるとも言える。焦らず気楽に連句との付き合いを深めて行きたい。どうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

第十六回俳諧芭蕉忌 (第五十五回猫養会)

平成七年十月十八日

於 江東芭蕉記念館

正式俳諧興行

脇起り二十韻「海くれて」

第一部 正式俳諧興行「海くれて」  
第二部 二十韻興行八巻

次	第	役	割
一	席入り	宗匠	坂本 孝子
二	配硯	脇宗匠	佛淵 健悟
三	献花	執筆	上月 淳子
四	執筆呼び出し	知司	権頭 和弥
五	文台捌き	副知司	真田 光子
六	俳諧興行	同	須田 智恵
七	花前	座配	高橋 豊美
八	献香	座見	五味 蓉子
九	花の句披露	花司	梅田 利子
十	端作り	香元	八角 澄子
十一	吟声	配硯	浅賀 淑代
十二	文台返し	同	吉村恵美子
十三	作品奉納	同	八代 嬭
十四	納硯	老長	副島久美子
十五	挨拶		
十六	退席		

海くれて鴨の声ほのかに白し

風除をせし島の家々

ファックスで友への便り綴るらん

勧誘しきり陸上競技部

月になる夜を寝てしまふひとり者

喧嘩の種は今日も秋刀魚か

銀行が倒れ負けぬそぞろ寒

地球ぐるみで核の反対

寄神に寄られ唱へる御称名

トラになっても措かぬ杯

優雅なる江分利満氏はステテコで

横須賀辺り夜濯ぎの月

十聞いて十忘れたる情なき

若き娘の臍が大好き

ハイヒール履いて漸く女房並

小型となりしパスポート持ち

古稀すぎて夢は世界の山廻る

あれが春蟬鉦泉の里

花罪々と散り文豪の筆硯

連風上げる兄と弟

平成七年十月十八日 首尾  
於 江東区芭蕉記念館

二十韻「山茶花」

東 明雅 捌

山茶花やいつも翁は旅姿

垣根づたひにうつる雀鳴

グラタンを焦げめほどよく焼き上げて嬭

ご近所人気のミニコミ紙読む 久美子

猫の仔を捨てに行く人月の道 凡

抱擁の影おぼろおぼろに 美

なれそめのピースポットに春の涛 凡

古きチャペルの残る天草 恵

大酒飲み家代々の誇りとし 嬭

三十路過ぎても持たぬ定職 美

初獵の銃音響く山の陰 同

さいかちの実のからからと鳴り 恵

月覗く燐寸手ぐさに夜学の子 同

メジャーリーグの野茂になる夢 嬭

ラスベガスひと目に賭けて恋も賭け 雅

かつら付ければ美女がごまんと 凡

がたがたの入歯鳴らして色男 嬭

髑髏マークの黒きTシャツ 恵

音もなく空に広がる遠花火 嬭

鱒のたたきに生薑効かせる 美

平成七年十月十八日 首尾  
於 江東区芭蕉記念館  
連衆 須田智恵 八代嬭 副島久美子  
中川凡

二十韻「終咲き」

大窪 瑞枝 捌

二十韻「夢一文字」

加藤 道子 捌

二十韻「石露咲きて」

神谷 安子 捌

終咲き天の紺青香らしむ

残る虫の音ひびく折々

長談義上り框を塞ぎゐて

パソコン通信やっとアクセス

月世界探険ゲームコンティニュー

三角に積む新酒四斗樽

肩抱く金比羅祭の昂りに

転校少女皆のあこがれ

我輩は猫も読んだよ漫画本

遠洋航海船医暇なり

すててこに似たる民族衣装着て

ダンスに誘ふ灼くる眼差

侍も芸妓も昔鹿鳴館

政治家の言あいまいがよい

寒念仏鉦打ちすます月の峰

だんだん揃ふ始祖鳥の骨

フォンデュボーことごと煮立つ深鍋に

扇恋しむ春暑き頃

花万朶我在ることく無きごとし

幼児ひとりしゃぼん玉吹く

平成七年十月十八日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 内田麻子 蒲原志げ子 橋文字

高橋豊美 青木泉水

大床の夢一文字やしぐれの忌

枯れし薄の風情添ふ壺

マンドリン弦ゆるやかに調へるて

チワワ抱く児とお使ひの道

こはだ鮎酒をすすめて月賞づる

やっちゃ場小町いつも爽やか

そぞろ寒邪宗多弁の人を恋ひ

取材の梯子雨に濡れつつ

まなかひに忽とテールブルマウンテン

言葉通はぬひとの親切

夏場所の喚声潮のごと聞こゆ

軽鳧の親子の池に浮く月

リストラで窓際族も出向に

夫の隠れ家ついぞ知らざる

嫁入に守り刀の黒螺鈿

コピー商品すぐれものなり

肩借りて駅の階段降りるとは

我が誕生日春立ちし頃

花三分田谷の洞窟このあたり

彩とりどりに飛びし風船

平成七年十月十八日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 東郁子 百武冬乃 権頭和弥

佐古英子 中島啓世

石露咲きて水面に触るるばかりなり

群れて東へ飛ぶ都鳥

新築にからくり時計贈るらん

禁煙いまは快感となる

月淡くインターチェンチ黒き影

あれは妻恋ふ鹿の鳴き真似

盆替り袖つかまれて婿養子

ちんちろりんで又も勝ち逃げ

総選挙公認候補すねかじり

おじいさん「やせ」おばあさん「でぶ」

別荘は蟬声だけが溢れるて

アッピア街道探す片陰

アモーレ・ミオ胸の谷間に引き込まれ

貞淑さうに運ぶ白い粉

吟醸の米を削って団子屋に

三百年の翁忌に月

訪へば故里いつか過疎の村

いつも箒で終るあやとり

親善の相撲大使に花吹雪

凱旋門にゆれる陽炎

平成七年十月十八日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 式田和子 金久保淑子 佛淵健悟

萩原てる子 八角澄子

二十韻「桃青忌」

倉本路子 捌

二十韻「藪巻」

雜賀遊 捌

二十韻「旅硯」

原田千町 捌

誰彼のすこし老いたり桃青忌

路子

藪巻の藁まっさらな苑なりき

遊

桃青忌掌に入るほどの旅硯

千町

冬ざれの山映す大窓

八重子

池に次々降りる水鳥

弘子

笹鳴に蹤きたどる山道

満子

主顔隣の猫の坐りゐて

哲

よもやまの噂話の賑やかに

治子

大家族嬰の笑まひに和みゐて

一恵

増え吹きケトルソプラノで呼ぶ

代々子

漢字書取終る宿題

達子

コーヒー勧めテレビ観戦

守男

珍らしき閨満月あふぎ見む

利子

天窓にまんまる月のさしかかり

水壺

離陸する機首まぎれなく月に向け

孝子

村の歌舞伎の濡れ場身に入り

ゑみこ

薄暗がりに荷置く虫売

淑代

毬藻祭の男髭濃く

同

どびろくをぐつと呷ってアタックし

哲

新米の旨さしみじみ差向かひ

治

お互ひの鼓動聞き合ひそぞろ寒

満

切手を数多嘗めて速達

代

彼の好みのルージュオレンジ

代

おわれちまったオルゴール捨て

一

国連の要職辞任ためらはず

同

マーシャンもインターネットで始まりぬ治

治

米軍に頼りては泣く基地の街

孝

スピードジャック横向きの顔

利

賽銭泥棒はやる此頃

達

権勢犬が問題になる

一

アイステイ氷ばかりがゴロゴロと

ゑ

杉形に焼酎の甕積み上げて

同

遅昼のランチタイムに間に合ひぬ

守

捕へた蛇のとぐる巻く月

哲

端居の父の眺める月

代

力士浴衣に川風の月

満

大検があるさ高校中退す

ゑ

伝え来し古き絵草紙競売に

壺

鞘走る妖刀ぎらと夏芝居

孝

ボケベル暗号君だけが知る

利

あの娘の胸がわすれられない

弘

情事の後の魂の抜けたる

守

祖父はモボ祖母はモガとか写真帳

同

優等生マニュアル通りアタックし

同

凍蝶の翅を葉の詩集閉づ

孝

倫敦塔は霧につつまれ

代

百日間のクルーズの果

代

ラムのボトルに揺れる帆船

千

ふと寄りし音楽喫茶ビートルズ

八

剛情ののっぺらぼうが黙秘権

壺

年金で仲良く暮す夢を見て

一

青春の夢のせるふらここ

哲

朝寝に不覚取りし悔しさ

遊

春の炬燵をいつまでも置く

守

三代の庵主守れる花の寺

八

犬も連れうから揃ひて花を見に

治

流鏑馬の射手が払ひし花の枝

満

残りし鴨のたはむるる湖

利

春の虹立つ信州の山

壺

起伏まどかに霞む野の涯

孝

平成七年十月十八日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 本田八重子 中川哲 橋野代々子

梅田利子 吉村ゑみこ

平成七年十月十八日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 市野沢弘子 加藤治子 篠原達子

今宮水壺 浅賀淑代

平成七年十月十八日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 田村満子 山崎一恵 近藤守男

坂本孝子

二十韻 小春日や 峯田 政志 捌

小春日や活気みなぎる芭蕉庵

彩づきそめし千両の紅

エッチング猫好きの子は猫描きて

手焼きせんべいお土産に提げ

御堂筋願かけ寺に月昇る

秋狂言のあとをモーター

拗ね合うて育てる恋のやや寒く

海の底にも県境置き

八杆の長きトンネル通り抜け

神経痛の膝に苦しむ

夕風に揺るる梢の蝉しぐれ

月も覗くか夢のナイター

うす髭の異国少年ポランティア

老若問はず口説くなま酔ひ

紐一本ばらりと解ける寝巻き着て

読みすてにする谷崎の「鍵」

ねぐら指す鴉の声の山に消ゆ

孫の名札の立った苗床

旅靴けふのなごりの花をつけ

試食たのしき鯛の浜焼

平成七年十月十八日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 豊田好敏 下鉢清子 上月淳子

松本碧 登坂かりん

協起歌仙 けふばかり 東 明雅 捌

けふばかり人も年よれ初時雨

枯蟻螂のすがる枝折戸

遊戯室兎抱く子を真中に

あやとりの橋指にからませ

見はるかす岬の果に月登る

競輪帰り群のやや寒

うらなひの言葉秋思の種となり

まだ捨てきれぬ赤いバンダナ

青い鳥追っていつしかヴァンサンカン

連なれる山槍と常念

とりどりの表情をもつ羅漢様

冷酒なればいつも吞みすぎ

鶴篝の月を眺むる旅の宿

付句の友は勤務休んで

B型が多いと聞きし音楽家

亭主の葬儀高くつきたり

物納の決まりし庭に花吹雪

北の海にはかいやぐら立つ

銀の匙啜へて生れて蜆汁

鷹山公に学ぶリストラ

名僧の遺す墨蹟鮮やかに

泥棒市に誰か手を振る

連れてって夜間飛行としゃれこんで

羅を脱ぐ紫の夢

ジェラシーの蟻地獄にも密の味

砂漠に浮かぶ石の神殿

目玉焼片っ方だけ出されて

幽かに聞きし養虫の声

鉄垂鈴置き忘れられ月明り

座敷童子の笑みの冷まじ

パソコンの開発に老い木の葉髪

氷を割って得たる寒鯉

一族にはじめて出たる東大生

真澄の空に上る連風

滝桜花見の衆に混りつつ

囀りの中白河を越ゆ

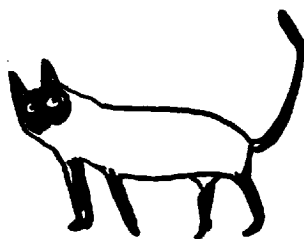
平成七年十一月十九日 首尾

於 東京芸術劇場

連衆 狩野康子 杉内徒司

東郁子 佛淵健悟

康 雅 康 悟 司 悟 郁 康 司





連句とRE NKU (3)

浅賀淑代

連句(俳諧)は、日本独特といわれる座の文学で、言うまでもなく、主に日本語によって表現されます。

一方、RE NKUは、外国の人々が、日本の伝統的な俳諧を踏まえ、式目に従い、各々の言語で森羅万象を織りなす文芸です。作品の数はまだ少ないようですが、「俳句からHAIKUへと」(佐藤和夫・早稲田大学教授)海外へ浸透していった俳句と同様のプロセスが展開するものと思われまます。この3月、6月と続けて刊行が予定されているW・J・ヒギンソン氏の"Haiku Seasons" (俳句の季節) "Haiku World to you" (国際歳時記)は発句、平句、雑の句を含み、RE NKUの発展に拍車をかけるものとして注目されます。さて、「国際連句」ですが、これは、民族や言語の異なる人々がひとつのチームとなつて生み出す、新しい俳諧です。表記はその方法がまだ一定しておらず、捌きが得意とする言語(訳語が併記される)に依ったり、出句される言語どおりに表記されたり、さまざまです。定型化も緩やかです。

遼遠」として、連句年鑑(平成七年版)に寄せられた荒木忠男氏(駐ヴァチカン大使)の評論は、いまだ模索段階にある国際連句定着へのプロセスのネガティブな要素も伝えて、考えさせられるものでした。

しかしながら、そうしたプロセスにもアクセルがかかっています。国際連句の進展の加速度は、一面で私どもの想像をはるかに越えています。日本語以外の言語を国語とする捌きが、出身国の異なる連衆をリードして、式目を重んじ、序破急の流れを意識しつつ連句作品を生み出していく頼もしいシーンを、目の当たりにすることも稀でなくなりました。

の月は、棟上げ(神祇)の月と恋の凍月、恋は、江戸遊女の恋、現代の恋(心象風景)と変化もあります。四季が詠み込まれました。句い、響きの余情付けもみられます。八句目から十四句目まで出句どおりの言語に訳を添えて載せてみます。

a toy mouse/peeks out of a pocket/  
New Year's renku party      Kris  
(ボツケよりぬすみも覗く初句会)  
January sixth /  
another day for the tree      Neil  
(六日もツリー飾られしまま)  
これは、今年正月六日、ある東京在住の米国人宅で、数か国からの連衆が巻いた二十韻 "New Year's renku party" (近藤クリス氏捌)の発句、脇です。即興的な、軽妙な挨拶が交わされ、楽しい一巻を予感させます。しかも、日本の伝統(正月)に西欧の伝統(ツリー)は1月5日に仕舞うのが慣わしですが、来客のために亭主は6日も飾ったままに。(調和して、俳諧となっています。一巻全部を掲載できないのですが、二か所

- 8 Extra flyer/ prime minister resigns  
(首相辞任号外の出る) Yoshiko
- 9 水中りそれとも蒲柳の質なのか Karin  
(is it/ a weak constitution / or water poisoning)
- 10 香港製の家電山積み Tateshi  
(a heap of appliances/  
made in Hong Kong)
- 11 Hotei - / flat on his back Neil  
belly in the air  
(寝っぴんで布袋は腹を丸出した)
- 12 abstract painting-ink / Yoshie  
scattered by strong hands  
(墨絵の墨のはしと飛び散る)
- 13 picking up / a fallen tea cup Y. Robbie  
their love still intact  
(毀れたるカップ拾いつ愛の変わらず)
- 14 frosty moon invites / Pat  
a galaxy of kisses  
(重ねてキスを誘う凍月)

日本の伝統という縦糸と異文化(民族性、言語)という横糸が織りなす曼陀羅(新しい俳諧)に期待がますますふくらみます。(了)

長唄語を話して下さい

大窪 瑞枝

「寝込み野甲斐二十日石」。ワープロを使った人は誰でもこの手の一括変換に目を白黒させた経験がある筈だ。逆上して、やたらキーを押しまくってやっとの思いで「猫養会初懐紙」にたどり着く。

同じことをやってくれるのが、我が女子大長唄研究会のギャル達である。新幹線とテレビが東京文化を同時放送する今時、東京に出て来て珍しいものなどないようだが、やはりカルチャーショックはあるのだ。それは何か、テレビがめったに乗せないもの。そのひとつに三味線、がある。そこでフーンおっしやれえかもと長唄研究会のドアを細目に開けた学生。器用な人なら構えや指使い、撥のあたりなど半年もすればできるようになる。曲もあれこれ生意気な希望を出すようになる。それからだ。彼女らにとって邦楽は全くの外国語だとはっきりするのは、「オ・ハ・ヨ・ウ・ゴ・ザ・イ・マ・ス」。ロボットのように一音ずつ譜を拾う。長唄の自然な文脈にならない。そしてこの「尾葉用語在増」が始まる。自然な邦楽の抑揚で「おはようございます」と読み下せる（弾き下せる）のには才能にもよるが、三年から後無限大までかかる。よく言われることだが、明治の始め日本の音楽教

育を西洋音楽に限定したことは、ある日のことと突然英語を公用語にすると発令したのに等しい。政府の当事者に深い洋楽の見識があったわけではない。富国強兵の国家目的に沿う軍隊や学校の音楽は洋が好都合と判断しただけである。だからその頃の子供は学校ではドレミの唱歌、家へ帰れば親兄弟も邦楽と、一種のバイリンガルだったわけだ。

やがて時過ぎ邦楽の最後の担い手だった世代も去り、今や日本の最も優れた音楽的才能が洋楽を表現手段として世界に評価されるような作品を続々と発表する時代になっている。一方昭和以降にも邦楽の新作は数多くあるが、みな器用なばかりで観念的で弾いても聞いてもすぐ底が割れてつまらない。近世邦楽を開花させた江戸大阪の生活者の生きた哀感がもうないのだから、ジャンルとして新しい作品を生めるわけがない。

では何故私が邦楽といういわば死語を語り人にも教えているのか。洋楽というものがなかった頃に日本には武満徹も小沢征爾もいなかったわけではない。その頃の彼らは三味線音楽で時代の最高の表現をしていた。その有名無名の天才の作品の美しさが惜しい。くりかえし糸に乗せて今の世にあてていたい。若い人達にもその素晴らしさを理解して弾き続けてもらいたいと思う。

連句と酒 \*

「あられ蕎麦」

中川 哲

ことはひさしぶりに東京にも冷たい冬が訪れて、北風の吹く正月気分になることができた。

たしか昭和も十六、七年の頃だったろう。福井隆秀と一緒に歌舞伎座の三階席で六代目菊五郎の「半七捕物帳、春の雪解」を観た。直侍の蕎麦屋の趣向を活かした洒落た芝居で、按摩役の六代目が囃る「あられ蕎麦」の旨さうだったこと。観てゐて、唾を呑みこむ感じだった。終演後銀座の「よしだ」へ駆けつけて、熱燗と「あられ蕎麦」で、芝居の面白さをしゃべりつづけた正月の思い出が強く残ってゐる。

二人とも若かった。

今でも、貝柱の旨い冬のうちしか、「あられ蕎麦」を食べさせない蕎麦屋がある。そんなこだわりも大切にしたいと、文音の付句に苦吟しながら、また今夜も酒を飲み過ぎた。

▽猫養会正式俳諧・連句興行

日時 四月二十五日(木) 一時より  
場所 亀戸天神社

わだとしお

杉内 徒司

◇歳旦三つ物 ◇ 頂いた年賀状に「歳旦三つ物」がありました。連句に馴染みのない方に出してしまおうと、「俳句でもなし、短歌でもなし、何？」と聞き返されます。そもそも歳旦三つ物とは？

以下、朝日カルチャー「連句入門」式田和子講師の講義より。

三つ物とは、発句、脇、第三を総称しています。承応元年(一六五二)松永貞徳が、四代目將軍の成人を祝して作ったのが始まり。

御成人の君に来てあふや千代の春 貞徳  
粧に竹にもわたる唐鳥 正章  
歟入るる苗代に小田の土肥えて 西武

江戸後期になって、「歳旦開き」といって、おめでたい三つ物を作るようになりました。作品は「歳旦帳」としてまとめられ、三つ物売りも出るようになりました。

作り方は、発句・脇が新年、第三は春でも無季でも、恋の句でも構わず、新年にふさわしい気持ちをごめて詠んでみましょう。

ということ、目出度くシヤレた三つ物の年賀状、来年はトライしてみてはいかが。

(H)

杏花村 連句誌。昭和五二(一九七七)・一、東京で創刊。月刊。わだとしお・中津洪・杉内徒司・山地春眠子らが編集同人。としおが経営を支えた。昭和六〇年四月号(通巻一〇〇号)で終刊。季刊「風信子」が継承。

(角川版「俳文学大辞典」)

右の短文は、としお執筆「杏花村」終刊の辞に依り私が書いた。

としおは野村牛耳主宰義仲寺連句会の第十一回(昭和四七年八月十三日・於青学会館)に初めて参加してきた。それから一年余後の四九年一月から月次会の作品控をつくって連衆に重宝がられる。この作品控を造り続ける情熱がやがて「杏花村」百巻を刊行するに至る。

牛耳(昭和四九年七月六日死去・八二歳)

の追善俳諧を目黒白金の八芳園で張行(昭和五十年七月六日)の折「野村牛耳連句集・摩天楼」が配布された。

その五月頃、この法事打合せの席上、「旧派ではそういう時は先師の俳諧集を編んで靈前に供えたもんだよ」と私が何気なく言ったら、としおは高島南方子と共に文音まで集め

て忽ち「摩天楼」をつくりあげたのだ。その素早さに驚いたら、「流石に週刊誌記者」と誰かが言ったのを今も覚えている。

彼には自宅に出していた「杏花村塾」の表札をそろばん塾と間違えて入門を乞われた話などもあったが、この「杏花村」から、星野石雀第一句集「薔薇館」や山地春眠子「現代連句入門」を刊行している。

彼は「杏花村」をやめてから、何故か名を村野夏生と変え、季刊「風信子」を出しているが、朝日カルチャー日曜講座「現代連句を楽しむ」を平成五年七月から十二ヶ月講義し、その教室で巻いた歌仙・半歌仙を「紅の喉ほか」として上梓している。

その「あとがき」に曰く、  
「講師が心掛けたことが二つあった。ひとつは現代連句の基礎としての蕉風俳諧の式目の精神を概説すること。そして、もうひとつは現代連句が現代の日本人による詩文芸の試みであることを忘れないこと。」

としお、本名は安達敏吉。昭和八年二月五日東京浅草竜泉寺町に生る。早大を卒て昭和三二年新潮社に入り、折から創刊準備中の「週刊新潮」編集デスクとして週二回の徹夜をつづけ、さる平成五年六月定年退職。

彼の近況は、ハガキに依れば——今は屋根裏住いの俳諧師として「雲の会」を主宰している。

【Q】連句を完成させたと言われる芭蕉が用いた形式はほとんど歌仙ですが、これは、連句美は歌仙形式に極まるといふことなので、どうか。連句形式のあり方についてお教え下さい。

【A】ご質問の「連句を完成させたと言われる芭蕉」という言葉は、いささか問題があります。連句というのは普通には明治以後の俳諧を指します。だから「俳諧を完成させたと言われる芭蕉」なら、よく分かりますし、それならば私も全面的に賛成です。

芭蕉が生きた元禄時代は、まさに新しい文芸革新の時代でした。そしてそれを果したのが、小説における井原西鶴であり、俳諧における松尾芭蕉で、西鶴の「好色一代男」（一六八二）と、芭蕉の「冬の日」（一六八四）は、その輝かしい金字塔であります。「冬の日」で確立された歌仙形式の俳諧は、それまでの百韻形式にかわって、俳諧の基本形式となりました。

百韻が首尾に、まる一日かかるのに対して、歌仙は約半日で済み、当時の庶民の生活事情・生活感情に適合したことが普及の第一原因でしょうが、それを抜きにしても、徒らに冗長な百韻に比べ、約三分の一の句数ながら三十六句の中に、序・破一段・破二段・急と微

妙な変化と繰り返しの味を堪能させる形式は、まさに過不足のないものとして、万人に認められて参りました。そして、これが明治以後の連句の世界に引き続いていられるのも事実であります。

百韻は連歌の時代の俳諧の基本形式であり、芭蕉以後の俳諧では歌仙が基本形式でありました。芭蕉が「俳諧においては老翁が骨髄」と言ったというのも、彼が「俳諧美は歌仙形式に極まる」と考えていたことの証明でしょう。

連句の時代になっても、歌仙はまだ基本形式である権威を持っております。しかし、連歌の百韻が、俳諧の歌仙に取って代わられたように、俳諧の歌仙も連句になると結局は何か新しい形式に取って代わられるでしょう。

歌仙は大体首尾に半日かかると申しましたが、現代の慌しい世の中では、半日という時間はなかなか作れないのではないのでしょうか。映画や演劇でも興行時間は約三時間というのが原則のようですし、また、作品を発表するにも、一巻三十六句、最低三十六行というのは、新聞や雑誌にはちょっと無理のようです。だから、昭和四十五年ごろ以後、胡蝶（二十四句）、ソネット（十四句）・居待（十八句）・非懐紙（二十〇二十四句）・二十韻（二十句）・蜂蟻（二十八句）など、より短い形式の試みがなされているのです。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。

二万円 島村曉巳

一万円 風蘭社

〃 (匿名)

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫養基金

.....S.....S.....

あとがき

○ 新年明けましておめでとうございます。戦後五十年の節目の去年は、いろんなことがあり、表現者の空想世界さえ色褪せさせる荒唐無稽とも思われる出来事の連続でした。こんな中でも、連句人は、しなやかに、タフに、現実を取材し、俳諧世界を膨らませて来たように思います。今年もまた、皆さまご健康に留意され、ご活躍くださいますよう。

季刊 「ねこみの通信」第二十二号

発行者 猫養連句会

編集人 〒一九五 町田市金井6-7-6

佛淵健悟

印刷所 アトリエ・Neko